

大通和座通信

# YAMATOZA

## 日々新面目

### 其の二十二

#### 安東伸元

一九八〇年から非常勤講師を勤めている大阪芸術大学は、今年度も出講を続けていて二十六年目になる。ついで一九八三年から二〇〇三年までを羽衣学園短期大学（のちに羽衣国際大学と改組改名）の専任教員として過ごす厚遇を頂戴することができた。更に、京都市立芸術大学へは一九八六年から二〇〇一年までの十五年間、音楽学部研究科に出講して教鞭をとる機会を得た。四十五歳から始まり、毎年文科省と各大学から承認を受けて継続してきた大学教員としての経過内容は以上である。昨年、私学定年の七十歳を迎え一応の区切りをつけるに当たってはたと難問を抱え大きな困惑を覚えている事があるので、今回は教育現場からの一つの報告としてこれを書いておきたいと思う。私が各大学で行ってきた授業は、古典伝統芸能・能・狂

言」についての講義と実技演習である。毎年開講に当たって授業内容を説明するシラバスに「能楽に関する正当かつ有効な情報を伝えたい」と明記してきた。書籍や報道機関が用意し展開する解説情報が不正確であると云っているわけではない。それらの能楽関連文書資料には、一定の様式理解と、それに連動した一定の鑑賞方法を教えんとするがための意図的な偏りが感じられるので、それを修正する意味で「正しく理解するための正しい情報を」と言っているのである。様式理解とは、武家式楽の時代を強調して流派と名家と家元制度の構図を既定の事柄として学習する事とし、そしてさらに数々の故事来歴やしきたりを知るといった古典の深淵に触れ、その情趣を味わう事が自身を向上させる好ましい良識であると教える。そして最後に、能・狂言は西欧古典演劇に肩を並べ世界にも通用する舞台芸術であるという説明が付される。この説明には先年のユネスコによる世界文化遺産認定の二ユースが万全の華を添える。さてこの理解の中から引き出される結果状況は、能楽について常套的に使われる「堅苦しく難しそうで、重々しい高級感を漂わせて遠くにあつて、簡単には近寄り難い」という形容詞の語調を助長こそすれ、真新しい発見や興味の萌芽にはつながらない。能楽界がどれほど現代に通じる普遍や親しみ易さを

と訴えても、カジュアルを装った外装の下に古典伝統印の鎧の制服を着込んでいるわけだから、大衆は敬遠していつこうに近づかないのである。さて私は、またしても体制批判の悪態を吐こうとしているわけではない。ここに書き記そうとしている事は、青年期に私が能楽の存在を明らかに意識して知り、それより今日に到るまでの思考体験を下敷きにした率直な報告とお考えいただきたい。私が狂言の世界に入ってから十年間は、ひたすら師匠の一挙手一頭足を真似る修業の日々であった。次の十年間は、狂言という芸能の正体を探り、それに関わる自分自身の位置を認識し、社会において古典伝統芸能「狂言」のあるべき意味などの考察を始め、様々な思考の壁に行き当たった結果、決して考究的ではないが多くの書籍を読み漁った。その中で私の思考に落ち着くべき視点と方向を与えた何冊かの書物があつた。特筆すべき著者は戸井道三、林屋辰三郎の両先生であつた。その中に一九六五年と入手日付のある一冊、「能（神と乞食の芸術）」戸井道三著（毎日新聞社/昭三九年刊）中の赤傍線を引いた部分を転記したい。「能がいいものであり、りっぱなものであるといいながら、そのよさを書いた本は日本に一冊もない。能の歴史や、能の約束や、謡曲の解説を書いたものなら山ほどある。しかし、能のいのちにせまり、

魂にふれた文章となれば、あるいはポール・クローデルやジャン・ルイ・バロウのものあげなければならぬのではあるまいか。そういう事実をまず知ることからはじめてほしいのである。「この一文がそれまで私の頭の中に渦巻いていた不審や不満や疑問を一気に吹き払ってくれた。現在も能の論究の主流は旧態依然として歴史と伝統を賛美する文言で満ちており、変わったことと言えば印刷技術の進歩によるため息の出そうな美しいカラー写真を満載した豪華仕立ての本が多くなったことである。そのような中で私は、前出した戸井田先生の言葉を乱暴にお借りすれば、能楽のいのちにせまり魂にふれたいと思つて自分を律し、その上で得た経験や考えを学生達に伝えようとしてきた。毎年出会つてきた学生の数は約一三〇名前後である。教員生活の最盛期には三つの大学と一つの公立高校のほか、二大学で短期の集中講義を受け持っていた。そしてこの場でも約十年経過したところで、能楽に深く心を寄せ大きく私に向かつて歩を進める学生が現れた。甘言をささやいて、だまして狂言の世界に引き込んだわけではない。自らの納得と意志でもつて、大阪芸術大学を卒業後、郷里へ戻らずアルバイトで生活を維持しながら大和座狂言事務所を心の拠り所に、狂言へ精進を続けようとしている者が二名。三、五年おかれて、この

二人に続く者が三名。つまり皆さんご存じの若手五人である。大和座通信の編集責任者のK君は、八年前に私の前に現れた羽衣短大の卒業生である。今年で七年目を迎える島根大学教育学部の三〇時間集中講義は、京都芸大で音楽学を修めたのち出身の島根大学に席を得たF助教教授の尽力で実現したものである。F君が京都芸大の大学院生として体験した私の授業を、島根大学でもと考えたきっかけが現場の支持を得て、かくも長く続いているわけである。このように私の教育活動は、微々たるものながら葉末で幾つかの小さな果実を育てたと言つてもいいかと思う。つまり私の考える古典伝統芸能への切り口が、教育的意義を持つものと実証されたということである。大洋への航海へ出るのに、一応の身体作りと基礎技術訓練を終えいざ乗船しようとする、そこに船があるにもかかわらず大和座の若い二人には乗船が許されない。タラップに足をかけ、数歩登つたところで梯子を外される様なことも何度か…。船上では身分的に乗船を許された者たちが楽しそうにふざけ合つて、着飾つた見送り人たちに手を振っている。私は哀れに不遇を訴え同情を請おうとしているのではない。乗るべき船が用意されなければボートで漕ぎ回るだけである。私はただ、教育の一端として公式に認め承された講義によって触発育成された人間

の落ちつくべき場所が、能楽界はおろか一般社会にも用意されていないという事実を伝えたいのである。古典伝統芸能の世界には江戸以来固定化された盤石の枠組がある。この世界への接近と参入を願う者は、いずれかの流派とどこかの家に門弟として所属し、その主家を支えるための滅私奉公に励む玄人になるか、敷居の外から古色蒼然の枠組みを賛美して奉仕的鑑賞に励む愛好者になるしかない。こう考えると、古典伝統芸能を題材にする教育現場では、ひたすら右のような人材の養成に努めるのが本筋であるという常識の存在に突き当たる。つまり私のやりかたは、現実に即さぬ無用の長物ということになる。研究論考も根本にある枠組の是非を問うものは排除される。歴史背景、事故実の研究が主流であるから、研究材料を秘匿している困い枠を壊すと、元も子もなくなるわけである。著しい建て前と本音の隔離に修正の手をくわえず、この枠組みを温存してきた社会構成によって、民族の共通財産である珠玉の古典文化がどれほど台無しにされてきたことかと思ひ当たる。この稿の始めに難問を抱え困惑していると言つたのはこの事なのである。先月実施された三日間の島根大学集中講義に先立ち島大松江キャンパスで「日本音楽教育学会」中部地区例会が開催され、私もパネラーとして参加した。教育現場における

古典伝統音楽の授業展開の実情について、色々貴重な報告を聞くことが出来た。結論は古典楽器の演奏指導のみを実施している例がほとんどで、授業はそれぞれの楽器の専門演奏家に任せきりで、教育的見地から専任の音楽教師が授業に参画することがない。文科省の要望通達にもかかわらず、教育の現場が古典音楽をつまき取り込んで教育的効果を上げているとは言い難い。物珍しさを主眼に子供の興味を刺激して遊ばせているだけ。子供は夜店の屋台をのぞき込んで一喜一憂の歓声をあげているだけ。これを、平素無縁に近い古典にまず関心を持たせるための必要な第一歩とする意見もあるが、それではそのあとの二歩三歩の展開があるのかと言えば、実は何の用意もされていない。この状況を岡山大学のO教授が「U・S・ジャパンを見る思い……」と評されたのが印象に残った。このところ「美しい国、日本」という言葉が大衆の耳目をとらえ、私などはわが意を得た賛同というより、これが首相の所信と聞いて戸惑いを覚えている。自律の精神を大事にする世界に開かれた国をめざす。そのための教育再生に取り組み、志ある国民を育て、品格ある国家、社会をつくるという。これまで政府がこの様なことを提唱するとき、これとさら古典伝統的な事物を持ち出し、それに光を与え古典の枠組みの補強に努めてき

た。しかしこの処方付け焼き刃の空念仏で終わって、今日を迎えていると思う。美しい国にするには、まず美しい精神に裏打ちされた美しい言葉（国語）をとり戻さなくてはならない。それは見せかけでない真正銘の古典芸能文化の摂取によって可能になるはずである。古典芸能を熱愛し、その道に人生を賭けたいと思う枠外の一滴の血が正当に受け入れられる状況の出現を願う。わが国の民度を誘導するインテリジェンスである有識者、学者、文化人の方々に切に視野設定の拡大を願いたい。



安東 伸元（あんどう のぶもと）

一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二一年、重要無形文化財（能楽）保持者総合認定を受け「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

## 狂言を読む「悪坊」

もろきゆう

『御伽草子』の中に「猿源氏草紙」という話がある。その書き出しには「中ごろのことにやありけん、伊勢国阿漕が浦に、鯛売り一人あり、もとは海老名六郎左衛門とて関東侍にてぞありける。妻おくれで、女（むすめ）を一人持ちたりしを、日ごろ召し使ひける、猿源氏といふ者にとらせて、すなはち鯛売の職を譲り、わが身は都へ上り、元結切り、海老名南阿弥陀仏とて、隠れなき遁世者にてぞありける。大名高家近づけ給へり。」（日本古典文学全集『御伽草子』）とある。この話はその後、鯛が大いに売れて裕福になった猿源氏が洛中で遊女に一目惚れし、その恋を成就させるといふ物語である。私が今回、注目するのは主人公の舅にあたる海老名南阿弥陀仏という人物である。南阿弥陀仏は、もともとは侍であったが、鯛売りで財をなした。その後、妻が亡くなったため商売を婿に譲り、都で出家して海老名南阿弥陀仏と名乗り、大名家に入りするようになった。侍、鯛売り、出家と職を変え、大名と付き合ひのできる人物となったという人生の変遷が面白い。南阿弥陀仏は文化的な教養があったからこそ大名に近づくことができたのだ。猿源氏

が鼻に恋の悩みを打ち明けたのも「この人と申すは、才覚世に越えたりし人なれば」とその才能が秀逸なのをたよりにしているからであった。それ故猿源氏が藤原家良の和歌を引用して語ることを聞き、その引用の不適切さを指摘でき、また『源氏物語』

や『源平盛衰記』も熟知し、的確なアドバイスをしているのだ。さらには「猿源氏草紙」の中だけではなく、『猿楽談義』に世阿弥や観阿弥を義満に推奨した人物として海老名南阿弥陀仏が記されている。「東国下りの曲舞（くせまい）『蓬萊宮は名のみして、形戮（けいりく）に近き』此段の名譽の所也。『南無や三嶋の明神』より、面白き所也。節は南無阿弥陀仏つく、西国下りは観阿節をつく。皆作者は玉林（たまりん）也。鹿苑院の御意に違して、東国に下りて程経てこの曲舞を書きて世子藤若（ふじわか）と申しける時、謡はせられけるに將軍家、作者を御尋ね有て召し出されける也。」（日本古典文学大系『歌論集・能楽論集』）とある。玉林と書かれている人物は琳阿弥（りんあみ）という連歌の宗匠であるが、東国に左遷されていた時、海老名南阿弥陀仏が玉林の詞に節を付け、西国下りには観阿弥が節を付けて世阿弥に謡わせるところ足利義満が喜び、玉林は都に戻されることとなったというのだ。ここに登場する海老名南阿弥陀仏は室町將軍に近侍し、

和歌、音曲などの文化を支える役として働いていた。室町將軍はこのような文化的才能のある遁世者を多数召し抱えていた。そのような人々の集団を同朋衆（どうぼうしゅう）と呼んだ。

それでは同朋衆というのはいかなる人達だったのか。村井康彦氏は『京の歴史と文化3』で同朋衆について詳しく述べている。そこには京都を中心とする室町文化は將軍家を中心とする武家文化であったことを述べ、しかもその特徴は一群の「道々ノ上手共」が將軍の周りで、それぞれの分野で奉仕したことだとする。その一群の阿弥者たちは義満のころから本格的に登場し、義持・義教を経て義政のころは多数いたとする。そしてその中には芸能をよくする者や、殿中の雑役をした者もあり、能阿弥や芸阿弥・相阿弥のように唐物・唐絵の目利きができる者や、室内の装飾を施す者もいた。また座敷の「立て花」に長じた立阿弥も義持・義教に仕え文化の形成に役立った。さらに茶事に関しては千阿弥という同朋衆も出現した。こういう人々を太平記では「トモニツレタル遁世者」とか「道々ノ上手共」と呼んでいたというのである。同朋衆の多くの者が法体であり、また阿弥号をつけていることから、同朋衆は時宗集団であるとされてきた。しかし、近年香西精氏の研究より阿弥号をつけているからといって、す

べてが時宗とは言えないとされた。また最近この同朋衆が描かれている絵が発見された。『足利義持若宮八幡宮社参図絵巻』である。それを見ると將軍義持に付き従う多数の侍に囲まれて三人の剃髪姿の人物が描かれている。頭は出家僧でありながら、その装束が派手な小袖に白い袴であるところが、侍たちと異なる人々であることをよく現している。

さて、狂言「悪坊」に登場する酔っぱらいは名を悪坊という。道中、禅宗の僧と行きずりになり、いろいろと難癖をつけ、なごなたを振り回して禅宗の僧をからかう酔漢だ。そしてそのなごなたで禅宗の僧を散々おどして自分の定宿へ連れて行くが、寝込んだすきに、なごなたや太刀、小袖を奪われて逃げられてしまふという話である。禅宗の僧が宿を逃げ出す時、この酔漢の素性を宿の亭主が教えてくれる。それは「六角殿の同朋に悪坊と云て、隠れもない酔狂人じゃ」（虎明本）と。六角殿とは、ばさら大名と言われた佐々木道譽の末裔である近江佐々木家を指す。康安元年南朝方に攻められ都落ちを覚悟した佐々木道譽は自分の宿所にしかるべき大将が入ってくることを考え、会所の畳を新調し、その上に虎の敷物を敷き、中国の画家の手なる観音像や山水画を掛け紫檀の卓に古代中国の銅製の三具足、真鍮の茶釜、銀製の水差し、朱塗

りの盆や天目茶碗を置き、さらに書院に中国絵画や書を並べ遁世者二人を留め置いて都落ちしたと言われる。この遁世者は同朋衆だつたらうと言われている。観衆は六角と聞いて、ばさら大名の同朋衆を彷彿した。そこには室町文化の一翼を担った同朋衆というイメージよりも、ばさらというイメージの方が強かつたのではないだろうか。それゆえこの男は阿弥号ではなく「悪坊」という名なのだ。村井康彦氏は同朋衆の仕事にもさまざまあり、下働きの者も大勢いたとする。同朋衆の職掌は多岐にわたっており、使い走り、殿中の掃除、配膳、贈答品の取り次ぎ、唐物のあつかい、座敷がざり、立て花、茶の湯、連歌の連衆などピンからキリまであった。悪坊はその名からも、またなぎなたをかついでいるところからも下働きの者だつたのだろうと思われる。

一方禅宗の僧といつても、ピンからキリまであった。原田正俊氏は「鎌倉末期、大波のように禅宗が日本に伝来してくると、鎌倉御家人はもとより、さまざまな階層の人々にまで影響をおよぼすことになった」という。禅宗は権力の中枢と結びついた五山が成立する一方で、放下僧や自然居士のような修行僧として民衆に交わる姿も多くあった。「学識なく身分の低い者でも、たちどころに悟り、仏となることができ

とが禅の教えとされる。こうした教えゆえに、禅は広範な人々の受容するところとなり、広がっていくのであった。」とあるように、さまざまな階層で禅宗は広がっていた。そこで狂言「悪坊」を見て当時の人々は何をおもしろがったのだろうか。悪坊は初め強い態度で横暴をふるっていた。禅宗の僧は酔っぱらいに絡まれて困惑する善人として観衆の目に映る。好対照をなす二人の立場がひっくり返るおもしろさが狂言にはある。観衆は寝込んでしまった悪坊のなぎなた、太刀、小袖を奪って逃げる禅僧に喝采を送り、小袖が修行僧の粗末な衣に、なぎなたや太刀が禅の道具や傘に変わったことに悟りを覚え、哀れに謡いながら引き上げる悪坊に喝采を送ったのだろうか。むしろ高潔であるはずの禅宗の修行僧が物欲に走り、無法者の同朋衆が悟りを開き托鉢に出るといふ結末のおかしさに観衆はやりとしたのではないだろうか。悪坊は「行脚の僧にはちを托き申そう、はっち、はち（虎明本）と言いながら去って行く。これは中世後期の禅宗の僧が托鉢するとき「はっち、はっち」と声を発していたそのままの言葉であった。



山田 師久（やまだ もろひさ）  
大阪生まれ。本名・山田茂。一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術プレーン。月例輪読会への座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教諭。

## 追悼桂文春

（天満天神繁昌亭オープンに際し）

## 森五六九（もりごろう）

九月十五日「天満天神繁昌亭」という落語専門の小屋がオープンした。大阪天満宮に隣接している。二百三十名収容のこじんまりした小屋である。当日は南森町から天神橋商店街を小一時間ほどかけて歩く「お練り」をおこなった。もちろん私も一協会員として同行。我々と商店街スタッフは揃いの法被を身に纏う。初代春団治にちなんだ赤い人力車には春団治相談役や三枝会長、春之輔副会長、染丸副会長、鶴瓶広報委員長らが交代で乗った。その後ろには三味線太鼓が続く。予想以上のマスコミや見物人に周囲は大賑わいだ。出陣式には太田房枝知事も真っ赤なジャケツトで駆け付けた。一方、小屋の前でのテープカットには関淳一市長。関市長のスピーチがふるっていた。「この小屋の何がえらいと言うて、市民の皆さんの御寄付によって建てられたことです。大阪市は一銭も金出してまへん」横手に立つ三枝会長が「そやそや」とあいづちをうつている。それだけでもちよつと微笑ましい光景だったが、ちよつと私の後ろの方からぼそつと「ホンマや。いらんとこに

は金使うけどな」という声。その周囲だけクスクスと笑っている。どうやら見物人の一人が声を上げたらしい。大阪の間はずつして「ああ言えばこう言う」黙ってはいられない性分なんだろう。関市長の挨拶はまるで突っ込んでくれと言わぬばかりの口ぶり。返り打ち覚悟のトークだったといえる。そんなわけで咄家の小屋オープンのスピーチのつかみは無難にこなした知事より市長の方に軍杯が上がった。小屋運営の問題はこれから山積みだが柿落とし公演は連日の大入り満員。演じる側からしてもとても喋りやすい。大阪の新名所になるのは間違いない。そして小屋の前には昔そこに置かれてあったという黒い郵便ポスト。「四角四面のポストでさえも恋の取り持ちするわいな」

そんなお祝いムードの中、実は哀しい出来事があった。本当に残念でならない事があった。それを知った時、通知のファックスを見つめ思わず部屋で一人「何でやねん」と声を荒げた。それは柿落としの千秋楽九月二十四日に出演が予定されていた桂文春君の訃報。享年四十一歳。二十一日のことだった。文珍師匠のお弟子さんだ。気管支喘息重積発作による死去。アトピー性皮膚炎の治療のため常用せざるを得なかったステロイド剤からくる喘息。人前に面をさらす仕事だから仕方がない。生まれつきの

喘息もあった。疲れ。それらが重なった。元から身体があまり強い方ではないとは聞いていたが全く急な話である。二年前、彼は奥さんを亡くしている。両親も幼い頃に亡くし家族にはほとほと縁の薄い男と聞いている。だから余計一生懸命に子育てに励み仕事に励み・・・無理がたたつたのだろう。けれど、彼は強がりなのかそんな事おくびにも出さないし誰よりもひょうきんな奴だった。私には元氣な明るいひょうきんに走り回っている彼の姿しか思い出さない。通夜の席、喪主の文珍師匠に続いて焼香に立ったのが四歳になる彼の一人娘。唯一の肉親である彼の妹さんに手をひかれて前に立った。事情なんかわかるうはずもなくただキョトンとしていた。「弟子にしてくれと来た時、ラメ入りのけつたいなジャケツト着て『何や、それ？』と思いましたが、逝く時も『何や、それ？』てな・・・」と悲痛に語る文珍師匠。ひょうきん者らしい逝き方と思えなくもないが、それにしても本当に「何やそれ？」である。文珍師匠によると、住まいも吹田から心機一転、八尾に宿替えをしてすぐその疲れからか体調をくずしたらしい。幸い四歳のお嬢さんは彼の妹夫婦が育てることになった。

彼が出演する予定だった柿落とし千秋楽の九月二十四日。彼がそこに来ているような気がして私は小屋へ向かった。代演は兄

弟子の珍念が務めるといふ。「弟弟子の文春がこんなことになりましたし兄弟子の私が」客席は連日のどよめきに比べ少しおとなしめだ。「彼が十八番にしていた『時うどん』を・彼、言うてました。『時うどん』は自信があるて。これやらしたら僕の右に出る者はないちゆうて。けど、左見たらぎょうさんおつたんですが・・・」珍念は見事代演を務め上げた。

楽屋に私同様その日出番のない福団治門下の桂福車もやってきた。私はあまり接点がなかったが、福車などはマージャン仲間でもありかなり親しかった。通夜で嗚咽する福車を私は見ている。やがて楽屋では珍念をまじえて「文春思い出咄」。「ホンマにアホやな、あいつは」福車の披露する彼のおとぼけぶりの数々は立派なネタになっていた。上方落語に「喜六」という人物がよく登場するが文春がまさにそんなタイプ。アホでどうしようもないわりにちよつとした知恵もある。けど何をやってもしやあないやつちやで済まされる憎めない愛すべき人物。文春本人が喜六そのものだった。彼を評して「漫画みたいな奴」という人もいるが、私はむしろ「落語界の住人」と言つた方が相応しいように思う。それも間違いなく「アホの喜六」だ。もし落語家の最低条件をひとつだけ上げよと言われたら私は迷わず「了見」と答える。「了見て何やね

ん」て聞かれるとなかなかムツカシイ質問だが、しいて申し上げるならそんな彼の失敗やおとぼけの数々を目くじら立てず「ええなあ」て笑える感性だと思つ。さぞかし彼もネタにされて喜んでることだろう。彼の存在は咄家の了見を試す格好の尺度だった。彼にはずるいところなんか微塵もない。欲もない。ただ人を喜ばせることだけが彼の喜びであり欲望だった。

けどな、文春！最後の失敗だけは笑えまへんで、絶対！！

この日は大和座の稽古日。千里山へ向かう阪急千里線の車中、福車の話す文春の失敗談を思い出した。「ホンマおもしろい奴やつたな、けつたいな奴やつたな」思わず涙があふれそうになった。福車は人情咄の名手だ。文章にならないので内容はあえて書かない。直接福車に聞いて欲しい。そしておいに笑つて欲しい・・・今日ほど笑い咄が人情咄に感じられたことはなかった。

2006年9月24日 深夜



森五六九（もりごろうく）

大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大阪スクールオブミュージック専門学校、大阪シナリオ学校の各非常勤講師の他AECカーチストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ「講座」も勤める。現代社会にあつて、好ましい芸能人の在り方を模索中。

# 兆紀探求「地域に根付く」

小田兆紀

今年に入ってから皆様にお伝えしている橋本市子供狂言教室ですが、その子供達の頑張りに同市の大人達が奮起しています。今回は子供ではなく大人の姿勢が変わってきたという現場の報告をしてみたいと思います。

橋本市民狂言を楽しむ会では、参加会員の平均年齢低下がおこっています。このように書きますと何だか問題が起こったように思われるかも知れませんがそうではなく、むしろ喜ばしい事態です。本年度から下は小学六年生、そして三十代の女性と男性が一人ずつ参加する事になり同会に勢いを与えています。高齡の会員の方達は「後進が入ってくれば私達はいつでも世代交代するつもりでいる」と言っていたのですが、実際問題として後進が誕生すると「まだまだ若い者には負けていられない！」という気骨ある態度に一転。対して新世代も若者の持つパワーで「先輩たちがこれだけやれているのだから私達も・・・」と、火花を散らすというのは多少言い過ぎかもしれませんが、互いに負けてなるものかという相乗効果を生んでいるようです。加えて昨年

て参加するようになり、子供達が受けている稽古内容を見て「人生の、そして狂言の先輩としていい背中を見せる為にも負けられない」と闘志を燃やしているように見えます。この縮図こそが昔当たり前のように行われていた「地域の大人が子供を導く」という事に繋がっているのではないかと考えます。

それだけでなく月に三回しかなかった稽古を自主的に三回追加、そして月二回行われる子供狂言教室にも見学という形で参加。人の稽古を見るということも稽古に含めますと昨年度の二倍の稽古量になったのです。とはいえ単純に稽古量が二倍になったからと言って成果も二倍かといえば残念ながらそうではありません。しかし、自分が受けた指摘をこれまでの様ではなく、他人の稽古を落ち着いてしかも客観的に見ることで、吸収や理解が早まってきているのは確かだと思います。その姿勢は毎週行く稽古で窺う事が出来ます。

これらの事柄は全て子供会が発奮材料になつているといえるでしょう。これまではどこまで頑張れるだろうかという気持ちとこのまま続けていて希望があるのだろうかという先細り感が同居していました。また、いくらやってみたくて発念した若者がいたとしても同世代の人間が一人もいない状態では尻込みするのも仕方ない事だと思

ます。しかし今ではそんな心配事は払拭され、橋本市民狂言を楽しむ会は見事に輝いていると言ってしまうても過言ではないでしょう。若者が参加したいと思つた時にその受け入れ態勢が整っている団体が、発足十年にして今ようやく橋本市で狂言が市民権を得てきた証拠だと思えます。

それを見守る観客の質は市民の意識も向上しているという事も報告しておかなければなりません。現在、毎年行われている我々大和座の狂言公演と併演する形で行われている橋本狂言会の発表会を楽しみにする市民も増え、アンケートに書かれた内容などからも、ガラス張りの物珍しい展示品を見る「古典を鑑賞させて頂きます」という姿勢ではなく芸術として捉えてくれているという実感を受けます。アンケートを見るまでもなく、本来くるべき所で笑いが起こり、緊迫した場面では観客も同じく緊張した空気で鑑賞しているという事実からも容易に想像できます。

先日橋本市と高野口町との合併式典で同会が、市の要請を受けて狂言を発表するという大舞台を得ました。まさしくいい加減な事をやっている会ではないと認知された証拠ではないでしょうか。今でこそこうして皆様に報告出来るようになった橋本市民狂言会での事です。当初は自分なんかで勤まるだろうかと思分不安になつたもの

です。初めての稽古日の前日などは随分緊張したのを覚えています。今まで教わっていた立場の自分が今度は人に、しかも人生の先輩相手に狂言を教えるという不安。ですがこれを自分のものに出たらこれまでとは違う世界が広がるという気持ちも全く無かった訳ではありません。

人生の先輩を前にして、少しはましな事を自分なりに話そう、そして少しでも何かを感じてもらおうという背伸びな気持ちで知識の吸収、咀嚼に繋がり赴任以降狂言に対する意識が多少変わったように思います。与太話ばかりではなく少しはましな事を人前で話せるようになったのはそのお陰ではないかと感じています。社会教育という大きな輪の中にまさに自分も居るのだと今更ながら思いました。今から思えば出来ない事が当たり前の状態で、いくらか背伸びして肉体化させてちよつとはましになつてこい、という師匠の人選だったのかも知れません。

数年前まで「社会教育」という単語すら知らなかった私が今こうしてその最先端にいるという実情には驚かざるを得ません。今も残念ながらその言葉に含まれる全ての意味を知っているとは言い難いでしょう。事実、その道の先輩方に言わせれば私のしている事などはそれにすら値しないものかも知れません。まだまだ色々と勉強する必

要があると思います。人生死ぬまでずっと勉強とはよく言ったものだなあと最近特に痛感します。自分自身まだまだ未熟だと感じてはいますが、新たな可能性の為、更に修練に励みたいと思います。

終



小田 兆紀(おだ ちようき)

一九七八年和歌山県新宮市生まれ。

本名・小田政明。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義で安東の薫陶を受け、卒業後「大和座狂言事務所」に所属し研修を重ねている。二一三年のイラン海外公演に参加、この経験は演劇を目指す人間として自覚を定める開眼脱皮の貴重な経験となった。二三年以来、橋本市の「市民狂言を楽しむ会」講師をつとめている。

「ホップ・ステップ・ジャ〜ンプ!」

金久蒼汲

狂言の訓練をする上で最も大切なことは、謡を謡うことである。謡を謡うことで日本語本来の力強さ、音感的な美しさ、国語としての味の深さを認識することができるからである。また謡のテンポや間、緩急や強弱といった発声法や、それをコントロールする為の呼吸法を習得することで、狂言の台詞は明瞭で清々しいものになるのである。「台詞は謡うように」とはよく耳にする言葉であるが、確かに狂言一番を一曲の音楽として捉えると、なるほど理解し易い。自分にとって好きな曲を思い浮かべて一体どこが好きなのが改めて考えてみると、その曲中のあるフレーズであったり、微妙な変化であったり、声質や音質であったりと様々である。だが実際に聴いている時にそのまま考えて聴いているかと言えば、必ずしもそうでないことの方が多いように思う。もちろん聴き方は人それぞれのだが、私にとって好きな曲とは、聴いていてまず耳に心地よい曲である。そしてその音楽に自分の呼吸や心臓の鼓動まで同調してしまうほど陶酔できる曲であるように思う。そのため聴き終えると、まるで自分が演奏し歌ったかのように、心地よい疲れを感じるこ

もしばしばである。あくまで私個人の感覚なので、多少極端な印象になるかも知れないが、「聴いていて耳に心地好い」という感覚は、万人に共通するものであると思う。狂言台詞において耳に心地好いということ、は、台詞としての日本語が聞き取り易く、また演者と共に役に対して感情移入がし易く、障害なく物語へ入り込めるといことである。

では実際に狂言を演じる際に、耳に心地好い台詞を発するにはどうしたら良いのであろうか。まず頭に浮かぶのは「二字上がり三段起し」である。これは狂言台詞の中のある一つの文章を言う際に、その文章のアクセントとイントネーションを表した法則である。例えば「これは／＼この辺りに住い／＼致す者でござる。」という台詞の場合、文章の二丁目である「これは」の「れ」を、その前の「こ」よりも明らかに高く発音しなさい。文章の三段目である「致す者でござる。」を一・二段目よりも明らかに抑揚を付けて発声しなさい、ということである。イメージで言うと、陸上競技の三段跳び、「ホップ・ステップ・ジャンプ」であろうか。ホップでその台詞のグレードと勢いを決め、ステップで呼吸とテンポの調子を調べ、最後のジャンプで感情の解放と共に大きな跳躍を見せ、緩やかな弧を描きながら美しい着地を決める、という感じであ

る。この「二字上がり三段起し」は、演出意図や演者の感情の変化に伴い、微妙に変化をしながらも、一曲の口開きから幕入りまで繰り返され、狂言台詞全体のリズムを築いているのである。一定のリズムで繰り返される西洋のマーチやポロ、ワルツといったリズムが、人間の心臓の鼓動と相まって、聴く者の心を高揚させることはよく知られているが、実は私達の狂言にも同じ手法が見られるのである。つまり、この「二字上がり三段起し」のリズムに裏付けされた台詞回しであれば、多少の変化を加えたとしても一曲中の大きな流れは乱れることなく、聴く者の耳に心地好いメロディーとなつて働きかけるといことである。

さて「ホップ・ステップ・ジャンプ」の補足であるが、その昔体育の授業で三段跳びをして、三段目にジャンプしたまでは良かったが、バランスを崩して空中でもんどり打って着地に失敗、尻餅をついたという経験をされたことはないでしょうか。実は台詞の三段目も同じ危険性をはらんでいて、注意を怠ると語尾が流れ、全体のリズムを乱し兼ねないのである。台詞としての日本語のメッセージは、演者の狙った着地点に力強く着地することで有効になる。そのため演者は、自ら発した台詞が緩やかな弧を描き、狙った着地点へ誘導できるような語尾には細心の注意を払わなければならない

いのである。また、たとえ狙った着地点に誘導できたとしても、勢い余って語尾が不明瞭になったり、着地前に消えてしまったりでは、せっかくの台詞が台無しである。しっかりと着地点を見極め、両足で踏ん張って確実に着地させることが重要なのである。安東先生の台詞を聴いていると、頭の中に台詞の文字が浮かんでくる。しかもその文字は墨をたっぷり吸った毛筆で、一文字一文字、力強く綺麗な楷書で、最後の一画のトメ・ハネ・ハライまできっちり書かれた、隙の無い筆使いである。話が半分飛躍したが、「二字上がり三段起し」の法則を完成させるためには、演者はこれくらいの意識と注意力を持って台詞を言わなければならないのである。冒頭に記した「台詞は謡うように」の本来の解釈からは若干逸れるかも知れないが、狂言を一つの音楽として捉えてみると、また違った側面が見えてきて、面白いものである。



金久蒼汲(かねひさ そつきゅう)

一九七八年広島県呉市生まれ。

本名・金久寛章。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。小田とは同期。同じく安東に師事して稽古に通い卒業後、「大和座狂言事務所」に所属して研修を積んでいる。演劇人としての肉体訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。二、三年、イラン公演で処女海外旅行を果たす。四年インドネシア公演旅行に参加。

# 大和座狂言事務所関連 催しのお知らせ

## 十月

二十日【金】午後一時 岡山大学教育学部付属中学校  
『狂言・落語鑑賞会』

- ・狂言「柿山伏」「附子」「演習」
- ・落語「時うどん」「お囃子教室」

二十五日【水】午前九時

神戸大学発達学部付属住吉小学校

『狂言鑑賞会』(非公開)

- 「蟹山伏」・「附子」・「講話と演習」

二十六日【木】午後一時三十分 池田市民文化会館

大阪教育大学付属高等学校

『落語・狂言鑑賞会』(非公開)

解説 古川嘉一郎

- ・「三年二組の高田君」桂あやめ
- ・「始末の極意」月亭八方

講話 安東伸元

- ・狂言「萩大名」(大 名)金久蒼汲

(太郎冠者)小田兆紀

(亭 主)安東伸元

三十日【月】午前九時三十分 奈良県斑鳩西小学校

『狂言鑑賞会』(非公開)

- 「いろは」・「蟹山伏」・「講話と演習」

## 十一月

八日【水】午前九時三十分 五条幼稚園

『成人教育関連狂言鑑賞会』(非公開)

- 「蟹山伏」・「附子」・「講話と演習」

十二日【日】午前十一時 法然院

『洗心会』謡と仕舞の会

- 「道成寺」ほか

十八日【土】午後二時 羽衣国際大学

『HEC狂言会』

- 「賞簪」・「左近三郎」・「盆山」ほか

## 十二月

十四日【木】午後二時

「古典伝統芸能と出会つひととき」その四十四

新シリーズ《室町の民衆像》

『福の神が登場して、庶民を祝福する』

- ・狂言の舞『三人夫』 原 斗轟

金久蒼汲

小田兆紀

『放下僧』 中西煌笙

『海道下り』 寺西将惺

『土車』 安東伸元

・講演：上方文化評論家 福井栄一

・狂言『福の神』 参観人甲 山田師久

参観人乙 井上放雲

福の神 安東伸元

(地盤) 金久蒼汲

小田兆紀

原斗轟

寺西将惺

中西煌笙

会場：千里中央 『A & Hホール』

(入場料) 会員 / 一 二 円

一般 / 一 五 円

「問合わせ」 A & Hホール

六 一 六 八 七 三 一 二 六 七

### 本の紹介

神戸大学名誉教授 山崎 馨 著・朗読

### 『万葉のまど』

出版：万葉に親しむ会

販売元：図書出版 和泉書院

古代日本語の在り方について詳細な研究を重ねられた山崎馨・神戸大学名誉教授がやさしく解き語る万葉講座です。平易で親しみのある表現によって、万葉のすぐれた世界、豊かな心がひとつひとつ解き明かされてゆきます。シンセサイザーの美しい調べにのって語られるこの講座は、これから万葉集を勉強しようとする人にも、もっと万葉の世界に浸りたい人にも、永遠に秘蔵できる一品になると思います。

朝日新聞社編集委員 林 梓生 著

### 『大阪力探訪』

大阪書籍出版

この本は、大阪の洗練された文化や芸能、そして先進的な取り組みをしている企業や大学を支える人への会、現場を訪ねてレポートしたものです。二五年四月から毎週日曜日の朝日新聞大阪版に掲載されたもので、大阪のパワーを感じさせるそんな一冊です。ちなみに伝統芸能部門の最初の記事に、桂蝶六こと森五六九さんが取り上げられています。

### 編集後記

「三人夫」という小舞があります。曲名のとおり、三人で舞う祝言性のある、めでたい舞です。一年の締め括りとして、十二月のA & Hホール公演で大和座の若手三人がこの「三人夫」を舞います。この舞の特徴は、切れの良い動きなのですが、三人が動きを揃えなければならぬため、互いに呼吸を合わせる事が大事になってきます。呼吸

を合わそうとする三人の張り詰めた空気が心地良い緊張感をもたらし、観る者をどんどん引き込んでいきます。「三人夫」がきつちんと舞われると、観終わった後に何とも言えないすがすがしさを与えてくれます。みな様どうぞご期待下さい。

秀

発行日 二〇〇六年 十月二十四日  
編者 許 秀美  
発行者 安東伸元

### 大和座狂言事務所

代表 安東伸元

〒五五五-〇八四一

吹田市千里山東二丁目3の3

TEL 06(6384)5016

FAX 06(6384)0870

http://homepage3.nifty.com/yamatoza  
e-mail: BYX04535@nifty.ne.jp

